

昭和
文學全集

21

大岡昇平集
三島由紀夫

昭和二十八年十月二十日 初版印刷
昭和二十八年十月二十五日 初版發行

昭和文學全集23
大岡昇平集
三島由紀夫

著者 大岡昇平
三島由紀夫

發行者 角川源義

印刷者 小田茂作

東京都品川區大井寺下町一四三〇

發行所

東京都千代田區
富士見町二ノ七

角川書店

振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙 本州製紙株式會社
クロース 日本クロース工業株式會社
印刷所 東日本印刷株式會社
製本所 小泉製本所

大岡昇平
三島由紀夫
集

昭和文學全集
角川書店版

目次

三島由紀夫集

卷頭寫眞
大岡昇平
三島由紀夫

筆蹟

大岡昇平集

筆蹟

俘虜記

武藏野夫人

野火

母

來宮心中

感想

年譜

假面の告白

愛の渴き

獅子

眞夏の死

年譜

解説

中村光夫

三〇

二八

二六

二四

二〇

一七

七

七

二〇

二五

二八

二九

三〇

大岡昇平集

孤影悄然

大易集

俘虜記

わがこゝろのよくてころさぬにはあらず
歎異抄

私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方山中において米軍の俘虜となつた。

ミンドロ島はルソン島西南に位置し、わが四國の半分ほどの島である。軍事施設としてみるべきものなく、これを守るわが兵力は歩兵二箇中隊、海岸の六つの要地に、名ばかりの警備駐屯を行ふのみである。

私の屬する中隊は昭和十九年八月以來、島の南部及西部の警備を擔當した。中隊本部は私を含む一箇小隊と共に島の西南端サンホセにあり、他の二つの小隊は、それぞれ東南ブラカオ西北バルアンにあつた。サンホセ、バルアン間、つまり島の全長を蔽ふ約五十里の西海岸の全部が開け放たれ、ゲリラが自由に米潜水艦の補給を受けてゐた。しかし彼等は攻撃しては來なかつた。

昭和十九年十二月十五日、米軍は艦船約六十隻をもつてサンホセに上陸した。我々は直ちに山に入り、南部丘陵地帯を横切つて、三日の後ブラカオ背後の高地で同地駐屯の小隊と連絡した。米軍は、ブラカオには上ら

なかつたが、小隊はサンホセの砲聲を聞き、糧食無線機と共に豫め退避してゐたのである。糧食は豊富にあり、まもなく我々と合流した附近水上機基地の海軍部隊、遭難船舶工兵、非戦闘員を合せ總員約二百名、なほ三ヶ月以上を支へ得るはずであつた。明けて一月二十四日米軍の襲撃を受けて四散するまで、約四十日我々はこゝに露營した。

米機は終日頭上にあつたが、米軍は直ちに追求しては來なかつた。「奴等は怠け者だからこんなところまでやつて來やしないさ。そつちが來なけりやこつちだつて行かないや。そのうち戦争も終るだらう」と我々の當分の宿舎となるべき小屋掛け作業を指揮しながら或る下士官がいつたが、これは我々の希望のかなり端的な表現であつた。即ち米軍がこの島をルソン島攻撃の中繼基地として選んだことが明白である以上、我々がこの山中にちつとして居れば、戦は我々の上を通過して、こゝは最後まで所謂「忘れられた戦線」として残る可能性があつたからである。我々のやうな孤立無援の小部隊の抱き得る唯一の希望である。

しかし不幸にして我々はやはり「行かない」わけにはいかなかつた。我々はやがてルソン島バタングス所在の大隊本部から敵偵察の命を受け、度々十數名より成る斥候が組織され、十日或ひは一週間、サンホセ附近の山中に潜伏して歸つた。或る時彼等は米哨兵

に發見され射撃された。

まもなく一箇小隊はサンホセを見晴らす高地に移動して分哨となり、毎日彼等が望遠鏡で見た状況を大隊本部に打電した。彼等は屢々數十隻より成る船團がサンホセ沖を通過北上するのを見、大型爆撃機が多數新設飛行場から離陸するのを見た。かつて我々がボートを操つて魚を釣つた灣内には、米内火艇が引揚げたやうな白い水脈を引いて疾驅してゐた。

一月に入り大隊本部は百五十名から成る斬込隊の派遣を告げて來た。しかし彼等の到着豫定日には米軍が中部東海岸一帯に上陸してをり、彼等を乗せた舟艇は以來行方不明であつた。もつともこの斬込隊は我々の間ではあまり歓迎すべき客とは考へられてゐなかつた。何となれば彼等の到着はとりも直さず、我々の中からも若干の決死隊を出して嚮導とせねばならぬことを意味したからである。六十隻をもつて上陸した米軍に對する百五十名の斬込隊の成果について、我々は何の幻想も持つてゐなかつた。

しかし我々はその後も命令により幾度かブラカオに出張し、或ひは到着してゐるかも知れぬ斬込隊を迎へに行つた。我々は無人の民家を荒し、たまたま家財を取りに來た不運な住民を拉致して歸つた。かうして我々は不本意ながらだんだん掃蕩される原因を作つたのである。

かうした絶望的狀況にあつても、我々兵士

は比較的暢氣であつた。我々は盡くその年初めて召集され、三ヶ月の教育の後こゝへ送られた補充兵であり、經驗の缺如から事態の重大さがびんと來なかつたからである。しかしいくら正確に事態を認識したからといって、いつ來るかわからぬ壓倒的に優勢な相手、毎日氣に病んでゐられるものでもない以上、かうした無智は我々にとつてむしろ一種天與の恩恵だつたといふことも出來ようか。我々は大部分私のやうな三十を超した中年の兵士であり、目前の事態から強ひて早急な結論を求めようとはしなかつた。

それに山中の生活は最初のうちはそんなに悪いものではなかつた。氣候は既に乾季に入つて雨も少なく、暑いのは日中、それも日向だけであるから、着のみ着のまゝの露營生活には手頃な陽氣である。糧食も差當つて不自由なく、分隊毎に疎開分宿したから軍紀もおのづから緩んで、兵士を片苦しい軍隊の日常の作法から解放した。我々はキャンプにでも來たやうな氣持で谷川の水で飯を炊き、マニヤンと呼ばれる附近の土民（これは海岸地方に住む一般比島人より色の黒い山地人で、戰爭に無關心である）と馴れて、赤布、アル貨等を與へて芋、バナナ、煙草等を獲た。我々はまた時々は麓に下り、飼主を失つて彷徨する牛を射つてその肉を食べた。

しかし災厄は意外な方からやつて來た。マ

ラリアである。

ミンドロは比島群島中最も悪性のマラリアの發生する島ださうである。しかし豫防薬をとつてゐたため、サンホセにゐる間は患者は二三名を超えなかつたが、山へ入る時衛生兵がキニーネを忘棄したので、やがて急速に蔓延し、一月二十四日米軍に襲撃された時、立つて戦ひ得る者三十人を出なかつた。最後の半月の間には大體一日三人づつ死んで行つた。

病人は靜かに死んだ。彼等の急激な意氣沮喪は著しく、その暢氣な日常と異様な對照を示してゐた。

中隊長は毎朝各分隊の小屋を見舞つた。彼は小屋に充滿してゐる病人を眺め、黙つて戸口に立ちつくした。

私の分隊長は米軍上陸直後まだ退路の開いてゐた間に、遮二無二北上してルソン島に渡らなかつたことにつき、中隊長の決意を非難する口吻を洩らした、彼によれば、こんな山の中にいつまでもまごまごしてゐるから、大隊本部から面倒な偵察の命令を受け、結局かうして病人が増えて動きがとれなくなつたのである。

下士官のエゴイズムである。しかしこの判斷にはルソン島を永久の安全地帯と見做す近視眼の前提が含まれてゐた。かつてノモンハンの戦闘を見た中隊長が、比島派遣軍の運命についてかゝる樂觀的豫測を抱懷し得たはず

はない。

彼は幹部候補生上りの若い中尉で、二十七八歳であつたが、無口で陰氣で、三十歳より下には見えなかつた。彼がノモンハンで何をし何を見たか、彼は一度も語らなかつたが、その眼その顔には現れてゐた。私は彼の體にその僚友の死臭を嗅ぐやうにさへ思つた。

「警備隊は警備地區をもつて墓場と心得ねばならぬ」と彼はいつもいつてゐたが、私は彼が通り一遍の訓示を行つてゐたとは思はない。

彼は我々の現在地を特に米軍から秘匿しようとはしなかつた。サンホセから道案内した土民には、慣習に反して食糧を與へ放ち歸らしめた。彼の言動には一種の諦めがあり、動作はいはゞ過度に緩慢であつて、時々齒の間から押し出すやうに弱く笑つた。犠牲者の笑ひである。

彼は幾分進んで死を求めたやうである。サンホセ駐屯中行つた討伐戦において、彼は常に先頭に立つて戦ひ、決して自分を遮蔽しなかつた。彼は自分では戦争の要請を至上命令として自分に課することを許しながら、それを部下に課することについては自己の責任を感じずにはゐられない、あの心の優しい指揮者の一人であつた。彼等一般にたゞ自己の死によつてしか、その部下に對する要求を正當化する手段を持つてゐない。

山中で最後に米軍の襲撃を受けた時、彼は

火點觀測のため單身前進し、迫撃砲の直撃彈を受けて最先に戦死した。恐らく本望だったらう。

一種の共感から私はこの若い將校を秘かに愛してゐた。私もまた私なりに、彼とはかなり違つた意味においてであつたけれど、自分の確實な死を見詰めて生きてゐたからである。

私は既に日本の勝利を信じてゐなかつた。

私は祖國をこんな絶望的な戦に引きずりこんだ軍部を憎んでゐたが、私がこれまで彼等を阻止すべく何事も踏まなかつた以上、彼等によつて與へられた運命に抗議する權利はないと思はれた。一介の無力な市民と、一國の暴力を行使する組織とを對等に置くかうした考へ方に私は滑稽を感じたが、今無意味な死に驅り出されて行く自己の愚劣を嗤はないためにも、さう考へる必要があつたのである。

しかし夜、關門海峡に投錨した輸送船の甲板から、下の方を動いて行く玩具のやうな連絡船の赤や青の灯を見ながら、奴隸のやうに死に向つて積み出されて行く自分の慘めさが肚にこたへた。

出征する日まで私は「祖國と運命を共にするまで」といふ觀念に安住し、時局便乗の虚言者も、空しく談ずる敗戦主義者も一瞥げに嗤つてゐたが、いざ輸送船に乗つてしまふと、單なる「死」がどつかりと私の前に腰を下して動かないのに閉口した。

私の三十五年の生涯は満足すべきものではなく、別れを告げる人はあり、別れは實際辛かつたが、それは現に私が輸送船上にあるといふ事實によつて、確實に過ぎ去つた。未來には死があるばかりであるが、我々がそれについて表象し得るものは完全な虚無であり、そこに移るのも、今私が否應なく輸送船に乗せられたと同じ推移をもつてすることが出来るならば、私に何の思ひ思ふことがあらう。私は繰り返しかう自分にいひ聞かせた。しかし死の觀念は絶えず展つて、生活のあらゆる瞬間に私を襲つた。私は遂にいかにも死とは何者でもない、たゞ確實な死を控へて今私が生きてゐる、それが問題なのだといふことを了解した。

死の觀念はしかし快い觀念である。比島の原色の朝焼夕焼、椰子と火焰樹は私を狂喜させた。到る處死の影を見ながら、私はこの植物が動物を壓倒してある熱帯の風物を眼で食つた。私は死の前にかうした生の汨瀝を見せられた運命に感謝した。山へ入つてからの自然には椰子はなく、低地の繁茂に高原性を秩序が取つて替つたが、それも私にはますます美しく思はれた。かうして自然の懷で絶えず増大して行く快感は、私の最後の時が近づいた確實なしるしであると思はれた。

しかしいよいよ退路が遮斷され、周圍で僚友が次々に死んで行くのを見るにつれ、不思議な變化が私の中で起つた。私は突然私の生

還の可能性を信じた。九分九厘確實な死は突然推しのけれ、一脈の空想的な可能性を描いて、それを追求する氣になつた。少なくともそのために萬全をつくさないのは無意味と思はれた。

明らかにこれは周圍に濃くなつて來た死の影に對する私の肉體の反作用であつた。かうした異常な状態にあつて、肉體が我々をして行はしめるものは頗る現實的であるが、その考へさすものは常に荒唐無稽である。

私は一人の仲間があつた。滋野は或る漁業會社の重役の息子で、私と同年の、妻子のある男だつたが、彼は銃後の資本家のエゴイズムに愛想をつかし（と彼はいつてゐた）その手先たらんよりは前線に出て一兵卒として戦ふことを夢みた。彼は内地で教育中前線出動の可能性をわざと軍に影響を持つ父親に知らさず、自ら内地に残る手段を絶ち切つてゐた。彼の夢は前線の状況を見て破れた。彼はわが軍が愚劣に戦つてゐると判斷し、「こんな戦場で死んぢやつまらない」と思つた。

この言葉は私にとつて一種の天啓であつた。この死を無理に自ら選んだ死とする倨傲が、一種の自己欺瞞にすぎないことに私は突然思ひ當つた。こんな邊鄙な山中でなすところなく愚劣な作戰の犠牲になつて死ぬのは、「つまらない」、たゞそれだけなのである。

我々は二人で比島脱出の計畫を立てた。その計畫とはかうである——いづれ我々が米軍

によつて現在地を遡はれるのは確實として、何とか敵中を潜つて西海岸に出る。そして住民の帆船を分捕り、季節風を利用して島傳ひにボルネオに通れる（この際私が海水浴場で覺えた帆走術が役立つはずであつた）。私はボルネオも安全とはいへないから、いつそ南支那海を突切つて佛印に渡つてはどうかと提案したが、滋野はそれは食糧と航海技術の關係で不可能だから、次善を選ばばかはあるまいといつた。

帆船が得られなかつた場合、我々は再び山に籠り、草の根でも食べて休戦を待つのである。我々は昔讀んだ「ロビンソン・クルソー」の細目を語り合ひ、土民に木から火を起す方法を學んでおいた。

この計畫はいかにも空想的であるが、我々はその實現の可能性を少しも疑はなかつた。

我々は繰り返して計畫を検討し、日に三人誰かが死んで行く中で、墓掘人足のやうに快活であつた（我々は實際墓穴を掘つた）。我々の最も身近な敵、マラリアに罹つた場合を考慮し、現在残つた唯一の對抗法、つまり豫め體力を貯へることに全力をあげた。我々は病人の残した粥を食べ、土に落ちた飯粒も拾つて食べた。

我々はかうしてあらゆる場合に備へて周到に計畫してゐたにも拘らず、たゞ我々がマラリアで發熱してゐる丁度その時、米軍がやつて来る可能性に想到しなかつた。

二人共申し合はせたやうに一月十六日に發熱した。私は毎日四十度の熱が續き、二日目に足が立たなくなり、三日目に舌がもつれた。滋野の症状は私ほど重くはなかつたが、熱は毎日三十九度以上出た。

最初の試練が來たのである。私は心に「武器を取れ」を叫んだ。私の體は強健ではなかつたが、病に對して比較的抵抗力があるのを知つてゐた。私は細心に自分の症状を観察し、療法を自分で工夫した。熱のためすぐ下痢が始まつたのを見て、消化器に無益な負擔をかけないために（これがその時の私の考へであつた）一切食べないことにした。半月位食はずにゐても、體力を維持するだけのエネルギーを貯へてゐると、私は自負してゐたのである。

衛生兵は山へ入つてから奇妙なマラリア療法を發明してゐた。つまりマラリア患者は水を呑んではいけないといふのである。私はそれまでの盲従の習慣を一擲し、斷乎として反對した。あらゆる證據をあげて、禁止の無意味なることを證明した。分隊長は怒つて兵士が私のために水を汲むことを禁じた。私は他の分隊の兵士が通るのを待つてひそかに頼み、或ひは自分で十間ばかり離れた泉まで匍つて行つて水筒に汲んだ。

私は死がマラリア患者を急激に襲ふのに氣がついてゐた。私は絶えず自分の體の状態を監視し、まだ死につかないのを確かめた。私

はまた病人が死ぬ前に糞便を失禁するのを知つて、苦痛が激しくなると、わざと戸口まで匍ひ出して小便を試みた。

この間に一人同じ分隊の兵士が死んだ。屍體は私の胸を越えて運ばれた。分隊の全員が病人であつたから、比較的軽い病人が土葬を手傳はねばならなかつた。長らく發熱してゐて少しよくなつたと思はれた一人の兵士が、死人の装具を一町ばかり上の中隊本部まで返納にやらされた。歸つて小屋に入る時、私は彼の顔が異様に歪んでゐるのを認めた。翌朝彼は死んでゐた。

この兵士が死んだのは一月二十二日である。私も少し熱が下り、夕方發病後初めて少量の粥を嚥つた。その時展望哨が米船三隻がブラカオ灣内に入るのを見たと傳へた。

分隊長は中隊本部へ行き、なかなか歸らなかつた。歸つても不機嫌に横になつたきり何もいはなかつた。我々は通りすがりの兵士から、直ちに四名の斥候が出たといふことを聞いた。

翌朝眼がきめて小屋の周圍が何事もなく明るくなつてゐるのを、不思議な氣持で眺めたのを憶えてゐる。私は漠然とその拂曉米軍が來るかなと考へてゐたのである。その日も一日無事に暮れた。前夜出た斥候は歸らなかつた。夜私は分隊長に「今日米軍が來なかつたところをみると、僕は包圍されてるんぢやないでせうか」といつた。彼は「病人の癖に

生意氣いふな」といつた。

次の日は一月二十四日である。拂曉また一組の將校斥候が出た。七時頃一人の兵士が歸つて、一行は麓で米兵に襲撃され、將校は戦死したと傳へた。

分隊長はまた中隊本部に呼ばれ、すぐ歸つて、病人は非戦闘員と共にサンホセ方面高地の分哨小隊まで退避する、歩ける者は仕度しろといつた。そして彼自身も仕度をほしめた（彼も少し前から病人と稱してゐた）。

私も漸く歩いて便所へ行けるまで恢復してゐたが、分哨まで十五料の道は自信がなかつた。その先またどれだけ歩かなければならぬか知れたものではない。私は遂に自分がここで死ななければならぬことを納得した。

分隊長以下十二名中二名が死んで十名である。そのうち私を入れて四名が残つた。滋野は行くつもりらしい仕度を始めた。私も外へ出て、何となく小屋の周りを歩きながら、彼に改めて「俺は残るよ」といつた。

彼も大分よくなつてゐた。彼は私の腋の下へ腕を入れ「大丈夫だ。俺が助けてやるから一緒に行かう」といつた。私はふと歩けるところまで彼と一緒に行く氣になつた。私は分隊長に決心を變へたことを傳へた。彼は黙つてゐた。

各自押し黙つて仕度をした。別れの言葉は交されなかつた。

出發の時になつた。私が皆に隨いて歩き出

さうとすると、分隊長が振り向いて、しかし私の顔を見ないやうにしながら「大岡、残るか」といつた。私は咄嗟に私がいかに一行の足手纏ひになるべきか、私の状態が職業軍人の眼にどう映るかを了解した。私は「残ります」と答へ、銃を下した。

滋野は何故かこの時先發して私の見えないところまで上つてゐた。その時の状況では彼を呼び返す氣は起らなかつた。かうして私はこの比島脱出の相棒と、きよならもいはずに別れてしまつたのである。

この退避組は全部で六十名餘りになつたが、二料ばかり行つたところで襲撃され、ちりぢりになつた。米軍はこの時既に完全に我を包圍してゐたのである。滋野はその晩まで分隊長と一緒にゐたが、翌朝落伍してゐたさうである（かういふことを私は後で私と同じ俘虜收容所に來たこの分隊長から聞いたのである。彼は四名の兵士と共に一ヶ月ばかり山の中をさまよつた後比島人に捕へられた。彼はその手に残つてゐた手榴彈を投げなかつた）。

残つた者の取るべき行動については、何の命令も與へられてゐなかつた。兎に角各自靴を穿き、脚絆を巻き戦闘準備をして横になつた。

私はこの時分隊で一番重い病人であつたから残るのは當然として、他の三人が出發した連中と比べて、特に悪い状態にあるとは見え

なかつたのは意外であつた。

一人は衣川といふ有名な大正の講壇批評家の息子で會社員であつた。彼は常々命令された最少限度を行ふといふ頗る消極的な勤務振りを示し、上官の受けはよくなかつた。衣川は珍らしい姓であつたから、私は或る時彼に「君は衣川先生の親類かい」ときいたが、彼は「親類ぢやねえ」と囁んで吐き出すやうにいつた。それは「親類ぢやねえ、赤の他人だ」とは受け取れない妙な返事であつた。私は「息子だな」と感じたが、その返事が氣に入らなかつたから追求しなかつた。しかしサンホセに米軍が上陸する直前私が最初の發熱をした時、彼も足を傷めて班内にゐたが、飯盒に水を汲んで來て丁寧に私の頭を冷やしてくれた。その看護には女のやうな奇妙な優しさがあり、彼の不斷の人に馴れないエゴイスチックな態度とは似合はなかつた。私が前の質問を繰り返すと彼は素直に次男だといひ、間はず語りに彼の父が震災で不慮の死を遂げてから後の、一家の歴史を細々と語つた。以來我々は友人となつた。しかし彼は私と滋野の脱出計畫を冷笑してゐた。

彼ははつきりしたマラリアの症状を示さず、假病ぢやないかといふ者もあつた。少なくとも出掛けの滋野よりは遙かによい状態にあつたのは事實である。彼は口を曲げて「行つたつて残つたつて同じとき」といつた。彼は心は優しいが、幾分自分を粗末にする男

だつたやうである。

他の一人は土木師であつた。彼はサンホセ駐屯中上官の前でよく働き、屢々上等兵の勤務をつた。私は彼を阿諛者として嫌つてゐたが、山へ入り最早序列も昇進も問題でなくなつた後も、依然としてよく働き、進んで重い物など擔いだ。そして恐らくそのため分隊で一番先に病人となつたのである。私はこの齡になつても、まだ人を見る眼に誤りがあるのを秘かに愧じた。彼はもう熱はなかつたが、多分體が見掛け以上に弱つてゐたのであらう。

もう一人はおとなしい北多摩の百姓である。彼は行くとも残るともはつきり意志表示をせず、たゞ皆が出掛けた後で、見たら彼がそこにゐたといふにすぎない。彼はべそをかいたやうな顔をして、脚絆も卷かずに壁に向いて寝てしまつた。

時刻は殘留者が誰も時計を持つてゐなかつたので、はつきりしたことはわからない。私は通りがゝる兵士に飯盒に水を汲んで來て貰ひ、何度もそれを水筒に詰めようとして、億劫で止めたのを憶えてゐる。物音はなかつた。兵士もだんだん通らなくなつた。

突然、谷の下の方から三發の鈍い發射音が聞え、少し間をおいて中隊本部の山の上で、三發の澄んだはじけるやうな音がした。

小銃の音ではなかつた。私はそれまで迫撃砲の音を聞いたことはなかつたが、何故かこ

の時迫撃砲ときめてしまつた。しかも彈着を見るための試射の音であると思はれた。

皆起き上つた。表情のない顔であつた。「來たらしい——兎に角上まで行つてみようか」と私はいつた。皆「うん」と答へて身動きを始めた。

私は飯盒の水を水筒に移さうとした。手が震へて水は外へこぼれた。私は「死ぬのに水は要らねえや」と呟き、飯盒を遠く投げ飛ばした。

私の友人は屢々私が事にあたつて見切りがよすぎると非難したが、私が今日生きて歸つてこんな文章を書いてゐられるのは、ひたすらこの時この水を棄てたといふ一事に懸つてゐる。

私はなるべく身輕に身をこしらへて外へ出た。彈入も一個しかつてなかつた。その時の私の感しでは、私の生命はその三十發を射ち盡すまでは持たないのである。

他の三人はまだ中でごそごそやつてゐた。私は中隊本部まで一町の坂道を上れるかどうか自信がなかつた。私は「先へ行くぜ」と聲をかけて歩き出した。

「一緒に行かないのか」と衣川が不服さうにいつた。私は「歩けるかどうかわからないから、先に行く。多分途中で待つてるよ」といひ棄て、銃を杖に狭いジグザグの坂道を上り始めた。これがこの連中の見收めとなつた。身こしらへに手間とつてゐた彼等は、一人も

この米軍の砲撃正面となつた谷から出られなかつた。

私は不思議に歩いて途中休みなしに上り切ることが出來た。上ではみんな活潑に動いてゐた。二三人づつ隊伍を組み、緊張した顔を連ねて、無言で左右に摺れ違つてゐた。私は稜線を越えたところにある一つの分隊小屋に入つて腰を下した。二三人の病兵が銃を抱き、顔を歪めて横はつてゐた。

途端に小屋は炸裂音に包まれた。私は反射的に小屋を出て彈の來る方角へ伏せた。今私が上つて來た谷の方角である。炸裂音は續いた。「前へ出る、前へ出る」といふ聲が聞えた（この時私達の位置から十米後方の衛兵所に彈が落ちて、一人の兵士が大腿骨を碎かれたのである）。私は匍つて前へにじり出た。炸裂音はなほ前方で激しくしてゐた。私は前進を中止した。「前へ出る」の聲は續いた。

中隊長が出て來た。彼は背負つた鐵兜の上から上衣を羽織り、慥慥のやうな恰好をしてゐた。彼は「賑やかでいゝぢやないか」と笑ひながら雙眼鏡を持ち添へ、彈の來る方向へ、映畫の畫面を横切る人のやうに歩いて消えた。これが私が彼を見た最後である。

二十人ばかりの兵がそこらに伏せてゐた。私は隣りの兵士と顔を見合せた。熱病患者らしく蒼くふくれてゐた。その顔も笑つてゐた。

彈はまた一しきり激しくなつて依然前方に

落ちた。それから止んだ。

「隊長殿がやられた」といふ聲がし、「衛生兵」と呼ぶ聲が続いた（この衛生兵も後で收容所で會つたが、彼は中隊長の屍體を見付けることが出来なかつたといふ）。

先任軍曹が来て、「病人は谷に降りる」といつた。私は今しがた休んだ小屋へ行つて病兵を促がした。彼等は私が最初入つた時と同じ姿勢で寝てゐた、そして聞えるのが聞えないのか、身動きもしなかつた。

我々は私が登つて來た谷とは反對側の谷へ、一列になつて降り始めた。病人でない者も皆降りた。私の前には先任軍曹が歩いてゐた。「隊長殿がやられた」といふ聲が後でした。私は私の前を、何の反應を示さずに動いて行く軍曹の背中を、不思議な生物を見るやうな氣持で見続けた。「軍曹殿、隊長殿がやられたさうですが」と注意したが、軍曹は振り向かず「さうか——ほんたうかなあ」といつて、歩度を緩めずに降り續けた。

谷を下りた所に別の軍曹が腰掛けてゐた。先任軍曹は傍へ行つて「隊長殿がやられたつていふんだが、ほんたうかなあ」といつた。「ふーん、ほんとかなあ」鸚鵡返しに相手は答へた。

彼等の會話は聞くに堪へなかつた。私がそこを離れようすると「みんなあつちへかたまつて、命令を待つてろ」といつて、谷の向うの空地を指さした。

そこには既に三十人ばかりの兵士が集つてゐた。病兵が道傍に倒れてゐた。或る者はうつ伏せに死んだやうに倒れ、或る者は銃を横に抱いて「く」の字形に寝てゐた。右手は彈倉に當てられ、彈を押し込まうとして力を失つてゐた。彈が地上に散らばつてゐた。私はその彈を込めてやり、兵士の體を揺すぶつたが、彼は眼をあかなかつた。

「安全裝置したか。暴發するぞ」と通りがゝつた兵長が怒つたやうな聲でいつた。

空地に集つた兵士の中に伍長が一人混つてゐた。「命令を待つて」といふ軍曹の言葉傳へると「けつ、命令なんか、待つてゐられるか。俺がうまく逃がしてやるから、みんな、來い」といつて一方の道をどんどん上り出した。私は機械的にいつて行つた。上りは辛かつた。私がずつと後れて半町ばかり上り、一息ついてゐると、一行はどどや引き返して來た。伍長は血走つた眼をして「駄目だ。こつちも撃つてやがる。あつちから行かう。あつちも駄目だつたら、銃座へ立籠つて、最後の一戦を交へるまでだ」といひながら摺り抜けて行つた。見知らぬ海軍の兵士が私を見て「しつかりしろ」といひ棄てて續いた。

私はぼんやり彼等の後を見送つてゐた。私はこゝまで上るのに力を使ひ果してゐた。一緒に行かうか、ついでに行けるだらうかと思案しながら、私はそこに腰を下ろしてしまつた。

一隊はずんずん下りて横へ切れ、林へ入つてしまつた。それはこの谷を少し上つてから別の尾根へ取り付き、先で今彼等が引き返して來た道と合する道である。私はその道を知らなかつた。

また一隊の兵士が足早に空地を横切り、林に吸ひ込まれて行つた。私はその中によく私のところへ身話をしに來た、或る若い兵士の姿を見たやうに思つた。彼もマラリアで寝てゐたはずである。その兵士の姿が私にまたいつて行く氣を起させた。私は思ひ切つて立ち上がり、下りて行つた。

空地には倒れた兵士の外誰もゐなかつた。林の中には道はなかつた。前方では兵士等の呼び交ふ聲が響いてゐた。聲はどんどん遠ざかり、やがて呟くやうな音となつて止んだ。その遠ざかる速度は私の到底いつて行けない速度である。

私はまた腰を下ろした。そして「わかつたよ。もう澤山だ。わかつたよ」と呟いた（かうして一人になつてから、私は始終聲を出して考へてゐた。恐らく自分の考へを自分に確かめるためだつたらう）。「わかつたよ」とは「どうせ俺はこゝで死ぬことにきめたんぢやないか。思つたより歩けたからいつて來たもの、どうせ皆と一緒にには行けないんだ。わかつたよ」といふ意味である。私は樹に似た大木の根元に身を横たへ、おもむろに腰の手榴彈をばづして傍へおいた。

今となつては、これが私の唯一の友であり、希望であつた。その強烈な爆發力は私を苦痛なくあの世へ送つてくれるはずである。

この時私がやがてこの道を來る米軍について何も考へなかつたのは、かなり奇妙なことである。恐らく私は到頭自分の最後の時に來たといふ考へに壓倒されてゐたのであらう。或ひは漠然と米軍が來るにはまだ間があると思つてゐたのかも知れない。さつき伍長がこの道の前方に聞いたといふ銃聲を、私自身は聞かなかつたからである。

何の感慨もなかつた。死については既に考へ盡くされてゐた。門司を出てから私の運命はこの一條の線から逃れることは出來なかつた。今その最後の一點に來たといふにすぎない。私は「まづ末期の水を」と呟き、水筒を傾けた。空であつた。

私は分隊を出る時水を棄てたのを思ひ出した。その時私は後でゆつくり水を飲む暇があらうとは思つてゐなかつた。また私は早まつたのかも知れない。私は苦笑した。その時急に渴きがひどくなつた。

私は今自分が存在するのを止めようとしてゐる時、一杯の水を飲むか飲まないかは、どつちでもいゝことだと自分にいひ聞かせた。その間にも渴きはどんどんひどくなつて行つた。

附近には水はなかつた。その時私のゐた谷の川は、我々がこゝに來た時既に流れてゐな

かつた。そして今は乾季だつたから、ますます干上つて、濁つた水がこゝかしこ、小さな水溜りをつくつてゐるだけである。水を飲むには再び中隊本部のある山を越えて、分隊の傍の泉まで歸る外はない。しかしその時の私には、そこまで行く力は残つてゐないと思はれた。

私は以前偶然この谷の上流らしいところを渡つた時、そこに水があつたのを思ひ出した。その水はたしか黒くなかつた。

私の知つてゐるそこへ行く道もやはり一旦中隊本部まで上るのである。しかしもしそれが事實この川の上流であるならば、この谷を傳つて行けば自然そこへ出るはずである。この道は平坦であり、なほ私の力に堪へさうである。

私は再び手榴彈を腰につけて立上がつた。そして藪を掻き分けて水のない川床に降りた。

私は前に今私が生きてゐるのは分隊小屋を出る時水を棄てたといふ一事に懸つてゐると書いた。第一、そのため私だけが一瞬の差で米軍の攻撃正面に當つたその谷から出られなかったのである。第二、さうして水を持つてゐなかつたため、私はこの最初を選んで死場所を離れた。もし私がなほ暫くそこにゐれば、私は米軍の手によつて完全に私の目を達してゐた。後で聞いたことだが、翌朝このあたりまで偵察に入り込んで來た分哨の兵は、私が彈

をこめてやつた病兵が胸を射られて死んでゐるのを見た。こゝは米軍の進撃路の一つに當つてゐたから、こゝにゐれば、私は確實に殺されてゐたのである。

川の水はさらに少なくなつてゐた。十間以上離れて飛び飛びに、一坪ほどの黒い水溜りがあるばかりである。

川に沿つて一條の道がついてゐた。私は機械的にそれを辿つて行つた。渴きは加速度的にひどくなり、一瞬も我慢出來ないほどになつた。思へば私は發熱以來こんなに長く水を飲まずにすごしたことはなかつたのである。

私は黒い水を見詰めた。異様な臭氣が立つてゐる私の鼻まで上つて來た。浅い水底に何か黒い昆蟲が匍つてゐた。私はその水を手で掬み口に含んで見た。舌を刺す味が、呑み込むことが出來なかつた。

大きな水溜りがあり、四五匹の水牛が浸つてゐた。我々がサンホセから荷物を載せて連れて來た水牛である。

水牛は私の顔をいぶかし氣に眺めた。その一頭と私は暫く眼を見合せてゐた。その顔は見れば見るほど人間に似てゐた。私は奇妙な混亂を感じた。水牛はてれたやうに顔をそむけ、一聲鳴いて水からあがつた。水がざぶざぶとその大きな體からこぼれた。その水もやはり飲めない水である。

水牛は川原からさらに岸に上り、林の中へ入つた。氣がつくとそこは兩岸が小さな崖を

なして迫り、道は川から離れて、今水牛が去つた林の方へ續いてゐた。水溜りの奥で谷は急に曲り、先は見えなかつた。

水牛を押し分けてその水溜りを渡つて行く氣にはなれなかつた。私は林に入つた道がまた先で川床に降りるだらうと推測し、その道を辿つて行くことにした。

それは私が降りたとは反對の側、つまり中隊本部のある山の側である。道は上つてゐた。私は兩側の枝につかまりながら歩いてゐた。道はどんどん川から離れ、林が切れて草原へ出た。そしてそこでまた大きく川とは反對の側へ曲つてゐた。

私はこれが川を廻行する道ではなく、陣地の正面（我々はこゝに陣地といふほどのものを構築してはゐなかつたが、中隊本部の前方半町、ブラカオとサンホセから来る道の合流點に、我々の持つ唯一の機關銃を据ゑる銃座を掘り、そこを正面と命んでゐた。さつき伍長が立て籠らうといつたのはこの銃座である）へ行く道、更に正確にはそこからこの谷へ降りる道であることを了解した。渡渉點へ行くにはやはり一旦その正面まで上り、私の知つてゐる道を下りて行かねばならぬらしい。

私は再び私の力を使ひ果してゐた。私は目的地の水がこれだけの努力に値するかどうかを疑つた。この水の減りやうから判断すれば、その水もやはり干上つてゐると思はね

ばならぬのではあるまいか。私はその林のへりに倒れた。

前方の草原はさし渡し十間ばかり、左手つまり谷の側から前面まで、ずつと叢林で縁取られ、右手のみ開いて緩やかに陣地正面に上つてゐた。そこには比島の丘々にあの柔和な夢幻的な緑を與へてゐる、細い長い萱に似た雜草が生えてゐた。

何の物音もなかつた。私がどれほどさうして横たはつてゐたか明らかでない。私はやはり自殺を考へてゐたか、溺れてゐたか、明瞭でない。これに續いて私の逢着した一つの事件が、この間事件と關係のないあらゆる記憶を抹殺してしまつてゐる。

確かなのは私が米兵が私の前に現れた場合を考へ、射つまいと思つたことである。

私が今こゝで一人の米兵を射つか射たないかは、僚友の運命にも私自身の運命にも何の改變も加へはしない。たゞ私に射たれた米兵の運命を變へるだけである。私は生涯の最後の時を人間の血で汚したくないと思つた。

米兵が現れる。我々は互に銃を擬して立つ。彼は遂に私がいつまでも射たないのに陣地を切らせて射つ。私は倒れる。彼はこの不思議な日本人の傍に駈け寄る。この狀況は實にあり得べからざるものであるが、その時私の想像に浮んだまゝに記しておく。私のこの最後の道德的決意も、人に知られたいといふ望みを隠してゐた。

私の決意は意外に早く試験の機會を得た。谷の向うの高みで一つの聲がした。それに

答へて別の聲が、比島人らしいアクセントで「イエス、云々」といふのが聞えた。聲は澄んだ林の空氣を震はせて響いた。この我々が長らく遠く對峙してゐた暴力との最初の接觸には、奇怪な新鮮さがあつた。私はむつくり身をたげた。

聲はそれきりしなかつた。たゞ叢を分けて歩く音だけが、がさがと鳴つた。私はうながされるやうに前を見た。そこには果して一人の米兵が現れてゐた。

私は果して射つ氣がしなかつた。

それは二十歳くらゐの丈の高い若い米兵で、深い鐵兜の下で頬が赤かつた。彼は銃を斜めに前方に支へ、全身で立つて、太股にゆつくりと、登山者の足取りで近づいて來た。

私はその不要憤に果れてしまつた。彼はその前方に一人の日本兵の潛む可能性につき、些かの懸念も持たないやうに見えた。谷の向うの兵士が何か叫んだ。こつちの兵士が短く答へた。「そつちはどうだい」「異狀なし」とでも話したのであらう。兵士はなほもゆつくり近づいて來た。

私は異様な息苦しさを覺えた。私も兵士である。私は敵撃ではなかつたけれど、射撃は學生の時實際射撃で良い成績を取つて以來、妙に自信を持つてゐた。いかに力を消耗してゐるとはいへ、私はこの私が先に發見し、全